

科学技術・学術審議会
資源調査分科会(第31回)講演資料

国際地域開発学の視点から見た 地域資源利用の地域づくり

2011年9月1日
名古屋大学大学院国際開発研究科
農村・地域開発マネジメントプログラム
西川 芳昭

国際地域開発と日本の地域の関係(試論)

- (主題) 地域の衰退という世界共通の同時代性を持つ課題に国際開発の視点から主に日本を対象に寄与する知見の紹介(開発学の応用+関係者の研修体験)
- (副題) 人々の資源理解の基準や方法は他者(外部者)が理解できるのか(ブルキナファソでの実験から)
- (副題) 国際協力を地域で行う・国際開発の経験を地域に活かす(青年海外協力隊員・NGOスタッフ・開発コンサルタントの経験)

日本の農山村のおかれている状況

- 急激な人口減少・過疎化＝30年後には今の80%に減少
- 13万9千の農業集落のなかで、集落機能を失いつつある集落が1万8千以上(2005年)
- 消滅の可能性のある集落には、生活基盤の維持や農林業の振興が必要

→しかし、

- 行政職員の数は、特に合併した市町村において大幅に減少・農林業振興予算も減少
- 同時に、合併による地域内の多様な地域資源利用や広域的土地利用、人材の多様化にも期待

3

集落の価値について見つめ直す必要(総務省)

- 時代に対応した集落のあり方に近づくためには、まず集落の住民が集落の問題を自らの課題としてとらえ、市町村がこれに十分な目配りをした上で施策を実施していくことが重要である。
- 行政経験者、農業委員など農業関係業務の経験者、経営指導員経験者、NPO関係者など地域の実情に詳しい外部人材を活用し、市町村に「**集落支援員**」(仮称)を設置
- 地区を担当する市町村職員などとも連携し、集落を定期的に巡回し、生活状況、農地・森林の状況等の把握。集落点検、話し合い、集落対策の推進などをサポート。
- 地域おこし協力隊や田舎に暮らし隊なども

4

代替的地域づくりの視点と手本交換の意味

- 地域は中央に従属するのではなく、誰からも支配されない住民の自立の生活空間
- 生活のためのよい条件を作り出し、個性を生み出し、文化の歴史を創造していく空間
- ➔ 日々の暮らしの価値の再発見による自信と喜び
- 個性的で固有の特性を持ち、その特色を発揮することによって、(日本)全体が複合体として豊かさを持ち、(世界の)豊かさへとつながる
- (守友1991を基に筆者解釈)

5

地域をみる新しい視点

- 生命体を採取・栽培・飼育するという農林水産業の基本的特質から、これらの生業を基盤とする開発は、土地から切り離すことが難しいため、農村を発展させるためには「場」を研究や介入の対象にする必要がある。
- モノ一般に固有価値があるが、それが人間によって把握されなければ、その価値は有効な形で利用されない。すなわち、固有価値の享受能力が人間に備わっているときにモノの有効価値が発現される。(池上 1998 ほか)

6

参加型開発を考える視点の議論(まとめ)

- 開発への行為は当事者の主体的・自発的取り組みによって行われることが望ましい(理念・目的)
- 開発プロジェクトの効率的実施・持続性の確保などを目的とする(手法・手段)
- 「内発性」を理念とするが「外部者」の参加は重要
- 「当事者」の参加が当然とするならば、検討すべきなのは「外部者」の参加のあり方である
- 参加はそれ自体常に、かつ自動的に「善」とはならない(参加したものの独善性)

出典:佐藤2003をもとに筆者修正

7

開発と参加における対立点

近代化の概念

直線的発展 ⇔ 多系的発展過程の認識

技術の位置付け

科学技術の卓越性 ⇔ 地域における伝統的知
恵の卓越性

地域住民

援助・開発の対象/受益者 ⇔ 開発の主体・資源/
専門家と共同の学習者

○ Shepherd 1998 p17 をもとに発表者修正

8

媒体者に期待される固有の文脈を理解する視点

古典的事例：1970年代における理解の変化

混作は無知な農民の象徴 ⇒科学的合理性を持つ農民

← 作物の混作は科学的合理性(水資源・土地資源・労働資源等の効率的利用)を持つという理解に基づく。(重田1994)

→ 科学的合理性という理解尺度そのものが、固有の知恵の存在を否定している可能性がある = 暗黙知を形成するプロセス(**tacit knowing** ≠ **tacit knowledge** (安富2008)) の理解が必要となる → 地域のtacit knowing のプロセス共有を媒体者がどのように仕組むかが課題。

- これは、多様性にあふれ、限定された条件下にある「場」(祖田 2000)の多様な開発を行う知識の創造である。

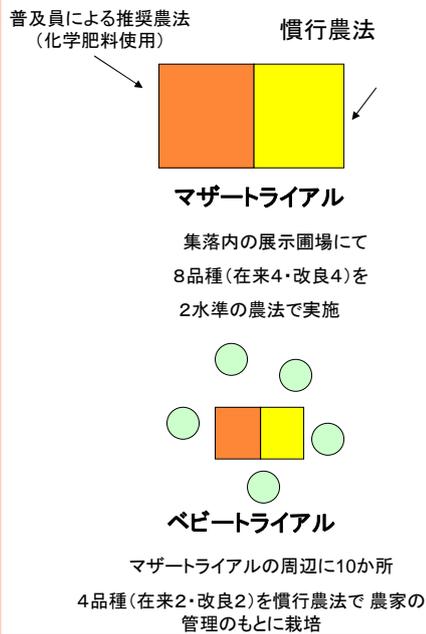
9

ブルキナファソにおける発表者の経験から (農民による作物品種管理の社会的能力)

- 目的： 各々の農民の圃場において「使いたい品種」を 農家自身が選択する能力を強化することにつながる実験(外部からの介入)手法の開発およびその手法における多様な外部者の役割・関係性を明らかにする。
- 優良種子普及を政策的に推進するブルキナファソにおいて、改良品種と在来品種の参加型評価を実施すると同時に、農家の慣行農法による栽培をブルキナファソ農業環境研究所と外部(日本)の研究者が記録することを通じて農家の評価基準を明らかにする。

10

採用した実験デザイン(マザー-ベビートリアル)



11

<<マザーベビートリアル>>

農学・社会科学的情報, データを結び付けて評価

従 来		本調査	
新技術・品種の効率的導入	目的	既知/未知の技術・品種に対する認識・受け入れ方を引き出す	
導入すべき対象	改良品種の位置づけ	多様性の維持	
【農】 > 【社】	情報量	【農】 < 【社】	
研究者 普及員 → 農民	情報の流れ	研究者 普及員 ← 農民	
指導的(教師)	普及員の態度	聞き役(ファシリテーター)	

12

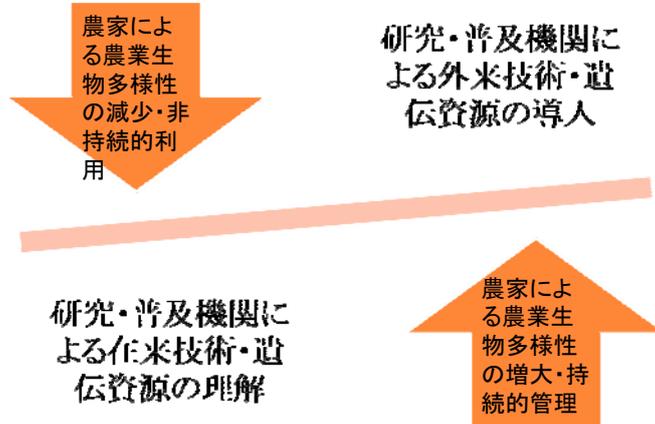


Workshop at mother trial

Table. Evaluation of improved and local varieties of cowpea by technicians and farmers in each survey sites.

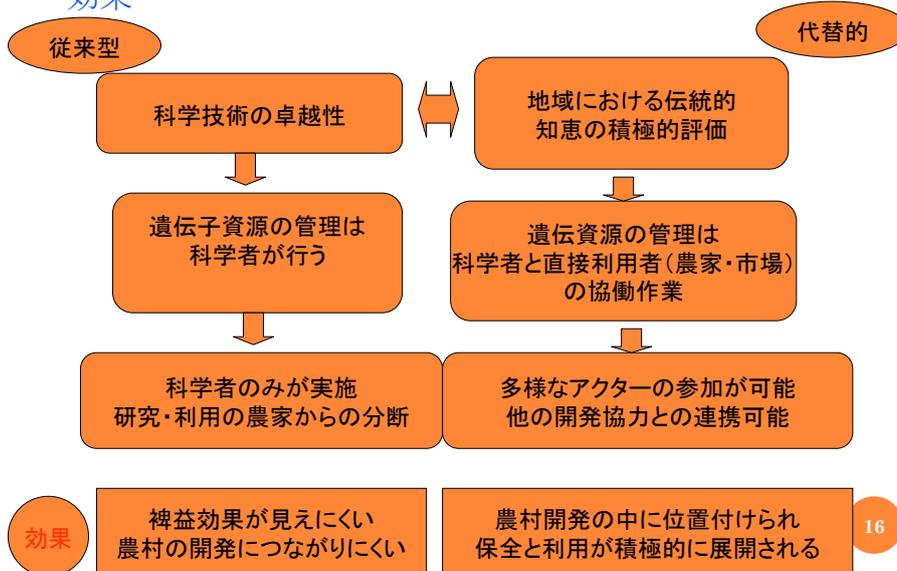
Site / Varieties	Technician	INERA Village								non INERA Village										
		P10	P3	P7	P5	P4	AVG	H	L	Lank	P2	P9	P8	P2	P6	AVG	H	L	Lank	
Improved	Pobe-Mengao	1																		
	KVX396-4-5-2D	1	6	6	6	1	4.0	1	6	3	7	2	6	7	5.5	2	7	6		
	KVX61-1	2	2	2	1	2	1.8	1	2	1	3	1	1	1	1.6	1	3	1		
	KVX775-33-2	3	8	8	8	8	8.0	8	8	8	6	4	7	8	6.3	4	8	8		
	KVX399-4-4	5	6	5	4	3	5.0	3	7	6	2	3	5	2	2.6	1	5	2		
Local	Moussa Local	6	3	7	4	5	4.8	3	7	5	5	6	8	3	5.5	3	8	6		
	Begraaaga	7	5	1	2	1	2.4	1	5	2	4	2	7	5	4.6	2	7	4		
	Local Golom	4	7	4	5	5	5.0	4	7	6	8	4	3	3	4.4	3	8	3		
	Begyanga	8	4	3	3	7	4.6	3	7	4	1	8	4	6	4.8	1	8	5		
Improved	Tougouri	1																		
	KVX396-4-5-2D	1	2	4	2	4	3.0	2	4	2	4	4	1	1	2.5	1	4	2		
	KVX61-1	4	6	1	4	3	3.5	1	6	3	3	3	2	2	2.5	2	3	2		
	KVX775-33-2	3	1	6	5	2	3.5	1	6	3	2	1	3	3	2.3	1	3	1		
	KVX399-4-4	2	3	3	1	1	2.0	1	3	1	1	2	4	4	2.8	1	4	4		
Local	Begpisnou	5	4	8	6	5	5.8	4	8	7	7	8	5	7	6.8	5	8	6		
	Local Gorom	8	8	5	3	6	5.5	3	8	5	8	7	6	8	7.3	6	8	8		
	Begyanga	7	5	2	8	7	5.5	2	8	5	6	6	7	6	6.3	6	7	6		
	Begraaaga	6	7	7	7	8	7.3	7	8	8	5	5	8	5	5.8	5	8	5		
Improved	Kiouyou	1																		
	KVX396-4-5-2D	4	8		8	2	6.0	2	8	7	5	5	4	3	7	4.8	3	7	4	
	KVX61-1	8	6		7	7	4.6	4	6	7	2	4	7	2	6.4	2	7	3		
	KVX775-33-2	7	1		5	8	4.7	1	8	6	3	2	2	1	5	2.6	1	5	1	
	KVX399-4-4	1	7	1	1	1	2.4	1	7	1	1	1	3	6	2	2.6	1	6	1	
Local	Moussa Local	3	2		3	6	3.7	2	6	3	4	6	5	5	8	5.6	4	8	7	
	Local Gorom	2	3		2	3	2.7	2	3	2	6	7	1	7	4	5.0	1	7	5	
	Pisvopoe-Zanrezaza	5	5		4	4	3.4	3	5	4	7	8	6	4	1	5.2	1	8	6	
	Kumassi	6	4		6	5	1.4	0	1	6	4	8	3	8	6.0	3	8	8		

研究志向型生息地内管理(保全)プロジェクト



15

農業生物多様性保全における技術・知識の位置付けとその効果



16

地域づくりと国際協力の統合事例

長崎県小値賀町におけるPRA研修

- 長崎県西方平戸諸島(五島列島)
- 人口約3,000人 西海国立公園
- 半農半漁の街
- 漁業資源の減少に伴う産業の衰退と人口減少・高齢化

しかし

- 本土(佐世保市)との合併阻止のまちづくり
- 国際音楽祭と島の提携構想
- 旧国土庁歴史資源を活かした街づくり
- アイランドツーリズムによる米国修学旅行の受け入れなど

17

日本の農山漁村における地域資源評価 (JICA研修=たからものさがし)



18

開発論における意義その1

代替的地域づくりの視点とその交換の意味

- 島で子供を産めないことに対する住民と研修員の共感（小値賀）
- 研修員の毎年の感想が同じであることは、自分たちが変わっていないことに気づく役場若手職員（小値賀）
- JICA研修を、市役所の新人研修に活用する試み（蒲江）
- 低交換価値・高生活価値の地域資源・産品の発見・再発見（滝川ほか）
- 合併をしなかったからこそ自分たちが頑張らなければ地域は発展しない気運の高まりの共有（阿武・小値賀）
- 途上国との交流は人材育成そのもの（世界平和・ふるさと見直し）（芦北）

19

研修員受け入れで地域に何が得られるか

- 「固有資源を活かした交流」と
「固有資源を活かすことの普遍性への気づき」
←住民と外部者・研修員の相互学習の実現
- 住民が国際交流・国際協力と地域資源の活用
の関連性に気づく
→国際交流・協力の地域再生への戦略的利
用

20

開発論における意義その2

地域開発計画論の三面性と外部者の役割

- 科学(science) = 「科学的」な実証結果にもとづいて将来への計画をたてる
- 技法(art) = 「科学的裏付け」はなくて、経験に基づいた判断によって導入される諸手段の有効性に期待をかける
- イデオロギー(ideology) = 科学的実証性や実現可能性よりも、それが理想として人々の心を奮い立たせることができるか
- 長峰1985
- ➔ 理念・(夢・ビジョン) ⇒ 計画・実施・評価すべてに住民の主体的な参加 ⇒ 地域住民による地域資源の把握・保全と利用に対する意志と能力 ⇔ 外部者の適切な支援

21

国際開発の知見と地域おこし ー松本市奈川を事例としてー

- 松本市奈川の概要
- 奈川で行われた事業1
 - 地域紹介地図づくり(マッピング、季節カレンダー、最終のまとめ)
- 奈川で行われた事業2
 - 聞き書き学習と議論から
- まとめ

22

事業1

「寄合渡にぎわい!未来予想図プロジェクト実践事業」

事業の目的

集落内の絆・集落への愛着や誇りを高める⇒元気な活気ある集落づくりへ

○ ねらい

外部者と内部者の視点のギャップ

⇒普段当たり前すぎて見過ごされている資源の
価値を再認識



- 内部者のリアクション。「昔のものはどんどんこわされてしまうね」「これは珍しい」というポジティブなものから、「自慢できるものではない」「外の人にとっては面白くないでしょう」というネガティブなものまで。
- 「若者に継続的に来てもらえなければ後がない」など
高齢化・人口流出に対する危機感の共有の場となった。

→しかし、ハツラツのイニシアティブが見られない

23

地域紹介地図をつくる

- 未来予想図事業の主導者は？
 - イニシアティブをとったのは県職員と役場職員であった
 - 地域側に事業形成における関与度が低かった可能性
- 認識の変化
 - 地域のビジョンの必要性への気づき
 - ハツラツ研究所の組織としての継続性への危機感の高まり
 - 世代間のコミュニケーションの必要性への認識の高まり
- 自身と誇りの高まり・前向きな姿勢
 - 寄合渡の資源に対する自信
 - 現状把握と今できることの模索



→外に発信の可能性

24

地域紹介マップ作り



集落を歩き



情報をまとめ



成果品としてまとめる



議論を行い

25

事業2

「地球時代のヒント・農村未来塾」

○ 農林水産省補助事業(NGO人材育成)

～聞き書きから学ぼう“参加型開発”と国際協力～

○ 事業の目標

- 研修生にとっては、地域資源の発見・地域の課題の把握・関係者の役割の理解・住民のニーズを理解・課題解決のための提案を行うこと→参加型開発の利点・欠点を学ぶ
- 住民にとっては、交流・議論を通して異なる見方・情報を得ること。

○ 事業の流れ

- 寄合渡について、参加型開発についての講義
- 聞き書き学習
- 研修生からの提案と議論



26

聞き書き学習や議論から

- 研修生 (NGOスタッフや学生) 側の学び
 - 山村社会の特殊性＝「半強制的な参加にならざるを得ない場合が多い」
→いわゆる「住民の参加」の難しさ。
- 住民側の学び
 - お年寄りたちが積極的に関わってくれるようになってきた。
 - 「じじばばの態度の軟化⇒若者が動きやすくなる⇒村が活発に⇒ますますじじばばの態度が軟化」(ハツラツ代表)
→外部者参加の効果？
- 国際開発と日本の地域開発の共通点と相違点
 - (共) 言うは易し・実際は難しい参加型開発
 - (違) 公私の区別なく住民と関わり合う行政職員

27

途上国と日本の地域状況の同時代性(可能性)

- 地域振興、地域経済開発の重要性が増している。
- グローバリゼーションの進む中で地域が直接世界とつながることが可能となっている。
- 少なくとも建前上、参加型開発が促進され、草の根、コミュニティの主体性や参加が重視されつつある。
- →アフリカを含む開発途上国においても、地域住民自身が自主的に地域開発に取り組もうとする事例が増えていることが**観察されてきている**。
- 量的開発以外の評価指標を持ち込むことによって、資源認識を中心に**当時者の意識の変化**を含めた地域開発の新しい可能性を探ることができる。

28

途上国と日本の地域状況の同時代性(課題)

- 制度としての**地方分権の急速な進展とその実質化の困難さ**=>制度的な地方分権の進展に、地方行政の能力構築が追いついていない(中央政府・援助側のコンディショナリティ)
- 経済の自由化や政府の権限の縮小が進む中で、伝統的に住民に対する財やサービスの提供の責任を期待されてきた**政府が、地域社会から離れていく**ことを余儀なくされている。(市町村合併・市場経済の導入)
- 経済発展を中心とした**国家政策の中で、農村地域が受けてきた負の影響**が大きい。(労働者の送り出し、無理な食糧生産など)

29

地域づくりファシリテーターへの期待

- 農村においては、多様性にあふれ、限定された条件下にある「場」(祖田 2000)の多様な開発を行う知識の創造が必要とされる。
- その知識の内容は、その地域における「学び、知識をわかちあう社会的プロセス」とも説明されうる。
- >>これは、地域住民のみならず、介入者にも期待され、多様な経験、視点を持つファシリテーターの役割が大きい。

30

○ ご清聴ありがとうございました。